

第58回連盟定期総会報告(11月7~9日開催)

◇『第24号議案「神学校献金」使途拡充の件』は賛成多数により可決

奥村理事長より提案趣旨、続いて加藤常務理事より提案内容と提案理由の説明が行われた。この提案は今までの神学校献金の理解を大きく変えることになるが、連盟が期待する伝道者像とその養成のあり方に関して、しっかりと共通認識を深め、連携を密にすることにより連盟の伝道者養成の働き全体を一層強めることができると期待する、と強調された。<審議内容~主な意見等>

- 8月の壮年大会総会において、「連立等神学校奨学金制度設立」について審議したが、その中で、現在東ハブに在学中のある壮年より、そのような奨学金は要らないと発言したが、真意は少しでも西南学院大学神学部(以下西南と記す)へ回して欲しいということであり、誤解を与えたことをお詫びするとともに、東ハブ、九ハブへの祈りと献げものという意義を踏まえ、本案に賛成するとの意見があった。
- 西南は教派神学校なのか、との質問に対し、加藤常務理事より、連盟規約にはその文言はないが、西南と連盟との覚書の中で、西南を連盟の伝道者養成の教育機関と明確にしていると回答がなされた。
- 諸教会、特に壮年会がこれだけ奨学金の問題に努力していることに感謝。さらなる願いは連立等神学校は経営の課題もあるので、連盟、特に理事会に連立等神学校に対し引き続き支援をお願いしたいとの意見があった。
- 本案に賛成。なお、連盟加盟教会の推薦を受けたものとあるが、その中に沖縄バプテスト連盟が入っていない場合は、是非入れていただきたいとの意見に対し、加藤常務理事より、検討事項とさせてもらうとの回答があった。
- 本案に賛成。東ハブの卒業生として感謝している。多様な神学教育のあり方、ニーズが求められているので、その範囲を広げるということになるので、是非皆さんも賛同していただきたいとの意見があった。

□ 本議案の成立により従来の「神学校献金」は **神学校献金(神学生奨学金献金)** となる。

<所属教会の代議員として出席した感想>

本件は8月の壮年大会の総会で継続審議となったものである。本来は連盟総会の審議を経て、全国壮年会連合総会に提案すべきものであることは承知していたが、西南神学生への奨学金という創設当時の熱き思いと、これまで築いてきたものを大きく変えるということの重要性から壮年大会総会に提案し、継続審議となったものである。今般、本案が可決されたことで、次年度の壮年大会総会で再審議をすることとなる。伝道者養成の業に参与する壮年として「神学校献金(神学生奨学金献金)」の推進に更なる拍車がかかることを期待したい。(報告:事務局長 井伊肇)

第2回奨学金委員会報告

第2回奨学金委員会が11月17日に連盟事務所で開催された。今回は報告事項として西南学院大学神学部報告と第2回理事会報告および第58回連盟定期総会報告(詳細は総会報告参照)を伺った。神学部報告の中では2012年度卒業予定者の動静を伺い、それぞれの卒業予定者にふさわしい働き場が与えられるようにとの祈りの課題が与えられた。また2013年度入学予定者の面接結果も報告され、新たに5名の編入生が与えられているという報告があった。その内4名は女性献身者であることも嬉しく受け止め、今後、連盟からの奨学金委員会担当理事として女性理事の派遣も視野に入れた方がよいのではないかとの前向きな意見も出された。議事では

- 2013年度進級する神学生の貸与奨学金申請者審査が行われ、奨学金を申請される神学生の学業の様子や研修教会での働きなどについて報告を受けた。
- 規程11条(奨学金の返還)該当者の確認を行い、特に赴任待機中の方には状況確認の通知を差し上げることとし、更に返還滞納者には文書で返還を促すことを確認した。これらの議事には委員全員が心を痛めながら対応している。特に思わされることは神学生(卒業生)と推薦教会との関係の大切さである。教会が神学生として推薦するという事は教会総会の決議事項であり、とても重要な事である。推薦された神学生も是非そのことを重く受け止め、在学中はもとより出来れば主に召される時まで推薦教会との良好な関係を保ち続けていただければと願っている。

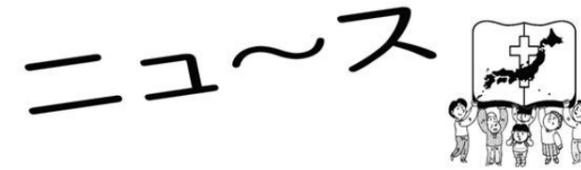
<委員としての感想>

委員会に出席していつも嬉しく思う事は、早朝、あるいは前日から家を出て連盟事務所に来られる委員の方々から笑顔を持って会議に出席されておられることです。会議の内容は決して楽しいことだけではなく、時には厳しい判断を迫られることもあります。伝道者養成のために祈り、支えてくださっている全国の兄弟姉妹の思いを背中に感じながら、主の御用のために仕えていきたいという委員の方々の笑顔に励まされています。(報告:奨学金委員 伊東信吉)

日本バプテスト連盟全国壮年会連合 〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4
事務局執務時間:月、水、金 10:00~16:00

☎・fax:048-886-7533 http://www.sonon.net sonon@bapren.jp
郵便振替 00150-7-669605 「日本バプテスト連盟 全国壮年会連合事務局」

全国壮年会連合



2012年12月19日

No.74

日本バプテスト連盟全国壮年会連合
発行人 大城戸一彦
編集人 井伊 肇
Topics password→sorengo

壮年の皆様の入学をお待ちしています

九州バプテスト神学校校長 安藤榮雄



クリスマスおめでとうございます! 皆様の上に、ご降誕の祝福が豊かにありますように! また九州バプテスト神学校のためにご祈祷・ご支援を賜り心より感謝申し上げます。

さて、九州バプテスト神学校は、新年の4月から、平尾バプテスト教会のご厚意により、福岡市の中心街に近い、新築の「クロスガーデン」2階の2教室と機材室をお借りし、移転することになりました。

平尾教会に心より感謝申し上げます。

当神学校の基本的姿勢は、毎年開かれる「スクーリング」に最もよく表わされています。2008年のスクーリングには、内村鑑三の専門家、李慶愛(り・きょんえ)折尾愛真短大准教授を講師に招き、内村鑑三の神学と思想を学びました。なぜいま内村鑑三を、といふかと思いますが、17世紀の初期バプテスト教会は、プロテスタント既成教会の根幹である「教職制度・幼児洗礼」を批判・否定して始まっています。無教会主義もまた、「教職否定・礼典否定」を掲げています。両者の長所と短所、とくに、自由さとともに混乱やアナーキーが避けたい両者を比較検討することによって、バプテスト教会の現在の課題に光を当てようと考えたわけです。翌年2009年から2012年まで、実に4年間、私たちは「キリストのからだ」としての教会を「教会のからだ性」として総主題に選び、――2009年は「教会のからだ性」、2010年は「バプテストの教会形成と信徒の働き」、2011年は「教会形成における聖霊の働き」、2012年は「二元論の克服」と年ごとの切り口は変わりましたが、――取り組んできました。2009年に講師に招いた寺園喜基・元西南神学部准教授(前西南学院院長)は「人間の問いに神が答える相関関係は人間主義・幸福主義に過ぎない」、そうではなく「神の問いに人間が応える応答関係こそ教会の姿勢である」と鋭く問いを投げかけました。この二つの言葉のあいだのせめぎ合いは、その後のスクーリングの基調低音になりました。

2010年の講師、渡邊亶(まこと)氏(恵泉教会会員)は「私の中の神様ではなく、神さまの中の私」、「私のためのキリストではなく、キリストのための私」へ成長・成熟しないとキリストの教会は成らないと問いかけられました。戦後の日本社会の根底を揺るがす3.11東日本大震災・福島原発大事故に出遭った2011年は、谷本仰・南小倉教会牧師が「聖霊は教会もその言葉も破壊し無力化する。その沈黙の中で新しい聖霊の言葉が与えられる」、天野有・西南神学部教授は「イエス・キリストは無神的・反神的な混沌と戦い、十字架につけられ、復活され、それを排除・棄却・否定された。私たちはバプテストによりイエス・キリストに与り、応答と決断を迫られる」、野口哲哉・連盟宣教部長は「聖霊は対話と関係の中で働かれる」とそれぞれペネラーとして語られ、衝撃や示唆を与えられました。そのほか多くの牧師や信徒の発題をまじえ、学生たちとの語り合いも年毎に核心に迫るようになりました。

4回のスクーリングの総主題「教会のからだ性」は、2012年の「二元論の克服」で、ひとつの到達点に至ったと思います。「せめて月曜日までクリスチャンでいてほしい」と日曜日と週日の分離や矛盾にさらされている私たちの信仰生活の「二元論」に、くりかえし問いを投げかけながら、安藤榮二・福岡ベタニヤ村教会協働牧師は、フィリピの信徒への手紙2章6節-11節を引用しつつ、「主イエスこそ『二元論』そのものではないか」とスクーリング開会説教で語りました。霊と肉・心と体・信仰と生活の「二元論」を共に・同時に生きて下されたのは、「真の神にして、真の人」である主イエス・キリストのみ。私たちは、もちろん、今もなお、矛盾や問題に悩んだり苦しんだり、時に引き裂かれたりするけれども、中心はただ一つ、イエス・キリストただお一人。私たちは、主イエスの先立ちに従い、献身と決断に歩み、「教会のからだ性」を求めて歩みたいと思います。

イエス・キリストの和解の歴史・出来事という「大きな物語」、創造から始まり、ご降誕、「神の国」の宣教、十字架の死と復活、再臨、「神の国」来臨への希望へと至る「主イエスの大きな物語」にかかわり、それを映し出すそれぞれの「教会の物語」を紡ぎ出し、教会に連なる一人ひとりが自らの「小さな物語」を紡いでいくこと。これこそが、戦前の極端なナショナリズムの「大きな物語」に回帰しようとする勢力が台頭しつつある現在、教会が立つべき使命と責任、そして宣教の課題ではないかと思います。

教会の壮年会と壮年一人ひとりに託された責任と課題は大きいと思います。「私たちのクラスの平均年齢は70歳になったので、この成人科クラスはもう解散してもよいのでは」という声があると聞きます。そうではありません。どんなに小さくても、天に召されるまで私たちは、それぞれの「小さな物語」を紡ぎ、「教会の物語」を紡いでいく大事な使命と責任が与えられています。

そのような献身者がいま求められています。牧師や伝道者として献身したいと思う方々だけでなく、教会リーダーとして、一人の信徒として主イエスと教会により良く仕えて行きたいと願う方も、ぜひ当神学校で学んでいただきたい。インターネットやDVDによる通信制もありますので、「働きながら学べる神学校」です。また、定年後の生き方を考えておられる壮年の皆様も、ぜひ当神学校で学んで下さい。決して後悔はいたしませんから。

《増5ページに九州バプテスト神学校在校生名簿と入学のご案内を掲載しております》

西九州地方連合壮年会と神学校献金

西九州地方連合壮年会長（佐賀キリスト教会教会員） 池田行伸



西九州地方連合は九州北部の西側、佐賀県と長崎県を対象地域とする地方連合です。長崎は観光のシンボルにもなっている大浦天主堂や原爆のあと悲惨な姿で残った浦上天主堂に表されるカトリックと、江戸時代に迫害をしのいだ隠れキリシタンの地です。佐賀は鍋島藩の城下町と古代の姿をよみがえらせた吉野ヶ里遺跡に表されるような歴史の地です。この地域の西九州地方連合は、連合主催で信徒の交わりである霊交会を定期的に開催し、教会間の信徒の交流を行っています。もちろんその中で壮年の交流も行われています。そのような交流の中で、長年壮年会で活躍し長崎教会で伝道師としても働いておられた前田文生兄を五島伝道の働き手として送り出しました。五島は長崎市の西方の海に広がる列島です。長崎市からジェットホイールで1時間、フェリーで3時間あまりかかるところにあります。そのような土地柄ゆえ急速に高齢化、過疎化しています。その五島にある富江教会、福江伝道所は宣教低迷の苦しみを訴え続けて来ましたが、そのような中で連合が五島支援を決め働き手を募って、壮年会で活躍された前田兄が手を上げ、前田兄を押しだし2年前から五島伝道に力を入れています。五島の人々のよき隣人となるため、五島で主の働きに励んでおられる前田ご夫妻を励ますため、是非観光としてでも五島を訪れて下さい。古いカトリックの教会堂が今も残り、迫害を恐れ密かに信仰を守り続けた隠れキリシタンを偲ぶことができます。

さて、西南学院大学がある福岡県と隣接する西九州地方連合は神学校からたくさんの恵みを受けています。教会が無牧になったときは神学校教員の応援を受け、神学生には連合や教会での奉仕で助けられています。多くの教会が神学生の奉仕教会としての経験を持っています。神学生が奉仕し研鑽を積む場を提供できることはこの上もない喜びです。このような地域の連合にある壮年会は自ずと神学校献金に力が入ります。教会員にアピールし神学校献金を募るだけでなく、昼食時にうどんやおにぎりを販売し、その売り上げを神学校に献金しています。神学校献金の多い教会、そうでない教会がありますが、それぞれの立場に感じ十分に奉じています。神学校献金という形ではなく、教会からの奉仕神学生に対する交通費や謝礼をとおしても神学生を支援することができます。神学生として学ばれた方が主に豊かに用いられ宣教の業に励まれることを願っています。

遠野でのボランティア活動に参加して

西南学院大学神学部専攻科（推薦教会：蓮根バプテスト教会） 中島宣光



私は、蓮根教会の皆さまから祈られ、送り出され、全国壮年会連合の方々から祈られ、現在、福岡市にあり西南学院大学神学部専攻科で4月から学ばせていただいています、中島宣光です。早いものでもう8ヶ月が経ちました。全国壮年会連合の方々からの祈りとお支えを、また蓮根教会、鳥飼教会の皆さまのお祈りとお支えを、心から感謝いたします。霊、肉共に、支えられています。牧会学、教会形成論、牧会心理学、説教、そして天野有先生には、教義学を教えてください。

とても難しい学問で、ふうふう言っていますが、とても楽しい授業です。そして有先生には、修了論文も見せていただいています。カール・バルトというドイツの神学者の本より、祈りについて今、進めている途中です。8月には、日本バプテスト連盟の岩手県の遠野市のボランティアセンターを拠点に、1週間、被災地支援のボランティアに参加することができました。本当に、すすんでいるのかと思わされる光景が広がっていました。真心ネットという地域のボランティアセンターより、ご奉仕を分けていただき、センターのリーダーの方の指示に従いながら、精一杯ご奉仕をさせていただきました。竹やぶの竹きりを朝から夕までしました。瓦礫処理も朝から夕までしました。毎日汗びっしょりで帰るのですが、「何もできなかった」というのが本音でした。しかし、主がすべてに先立って、わたしたちを導いてくださいました。真心ネットのリーダーの方から、「この汗をかいて、ボランティアの皆さんの必死にやっている姿を現地の方々は見えています。そして、自分にもできるかもと、励まされているはずですよ」とおっしゃっていただきました。被災地の現地の方々の少しの励みになっているのかと希望が満ちますようにと、祈りながらの作業でした。そこで、学んだことは、「なにかをしたい」ではなく、「させていただく」という姿勢、こちらからは、名前を挨拶し、話しかけていただくのを寄り添いながら、笑顔で待つということでした。「何を語るではなく、沈黙の中の本物の信仰が必要である」と。

聖書のみ言葉の力と、全国壮年会連合の方々からの祈りとお支え、また蓮根教会、鳥飼教会の皆さまの祈りとお支えを、感謝と希望を持ちながら神学校生活を歩ませていただいています。

本当に、全国壮年会の皆さま、わたしたち二人のために、祈り、励まし、支えていただいていることを感謝します。主が皆さまを通して、主の豊かな祝福がわたしたちにあることを気づかせていただいていることを感謝します。

全国壮年会連合の皆さまのうえに、主の豊かな祝福がありますように、お祈りをさせていただきます。



NPO 法人 CFF マレーシアの活動に関わって

吉野輝雄（仙川キリスト教会）

仙川教会員の安部光彦・かおり夫妻は、マレーシアのボルネオ島の北方パールの地に、親から養育放棄されるなど恵まれない子どもたちのために養護施設を作るというミッションを神から示され、NPO 法人 CFF (Caring for the Future Foundation: 子どもと青年の未来の基盤を築く) 活動に5年前から取り組んでいる。私は3年前から CFF の理事として支援に関わり、これまで4回現地を訪れ、そこに神のみ業が働いている事実を見てきた。具体的に

は、ビジョンに共感した人々の寄付によって与えられた広い土地が、果樹、魚の養殖池、湧水原に恵まれ、生活、青年達のワークキャンプ受入れに適していて自給自立、自然との共生を目指している安部氏のビジョンが着実に進展していること。また、かつてキャンプで現地に行った青年達が応援団を結成して日本で支援活動を展開、この2年間で390万円余集め、子どもの家1棟と通学用バスを寄付したことだ。1年前子どもの入所式に参加した時、現地の牧師、地域の人々が300人余出席し、周囲の関心と理解に支えられていることも分かった。

仙川教会は昨年度、教会が団体として応援団となる決議をした。その証しの一つとして今年の2月召天した仙波しげ子姉の遺志を受けてバス購入用に寄付した。また、今年11月に5日間の社会人キャンプに山岸明牧師はじめ5人の教会員が参加した。キャンプには現地人を含む30人が参加し、3~70歳に渡る年齢の者、障害者、スタッフ、ボランティアと一緒に道路を整地、花木の苗を植えるワークを一つの家族のように行った。期間中2人組がパートナーとなってワーク、食中など1日中一緒に行動し、互いにケアし合えたことが忘れ難い宝となっている。日曜日には地域のキリスト教会の礼拝に出席した。歓迎のダンスに迎えられ、私たちは賛美フラで応えた。代表して山岸牧師がかつての戦争のお詫びを述べた時、涙を流していた現地の方がおられ、民間の平和の働きの意義を覚えさせられた。「また来年も参加したい」「現地で働きたい」「足腰の痛みが消えた」という感想、前日まで続いた雨がワーク中は晴れ、帰国後に強い雨が降った、ワーク半ば十字架の形の雲が現れたという事実に神の臨在と恵みを感じた。

かつてキャンプに参加した青年の一人が6月に仙川教会でバプテストを受け、他の青年達もたびたび礼拝に出席している恵みにも感謝している。CFF との関わりが教会の業の一つになっていると確信し、これからも継続し行きたいと思っている(参考:「世の光」p8, 4月号(2012); <http://cffmouen.jimdo.com/>)。

東北バプテスト連合壮年の活動紹介<取材> (増6頁に写真掲載)

東北地方連合の教会壮年会の紹介にあたり、どの教会を選んだら良いか正直迷いました。いろいろ考えた結果、今回は1教会又は1伝道所を選ぶことはせず、宮城チームの壮年が女性会と共にいる被災地の支援活動を取材しました。壮年の皆様の中には昨年3月11日以降、実際に現地に赴かれ奉仕をされた方もおられ、今更と思われるとは思いますが、12月1日(土)日本列島が寒気に覆われていたその日、宮城チームと一緒に牡鹿半島給分浜の仮設住宅を訪ねました。天候は晴れ。嘘のような青空。山形からの連絡の中で「雪が積もっているので帰りは気をつけて」の言葉は冗談かと思いました。

当日は、クリスマスプレゼントということで「白菜、葱、小松菜、春菊」「シクラメンの花鉢」「卵」の3点セットでした。流れ作業で袋詰め。花鉢には連合の諸教会・伝道所からのクリスマスカードを添えて準備完了。次は、仮設住宅の各家庭にチラシ(添付)配り。このチラシ配りには酒田伝道所の3人の子どもたちも参加しました。→ α



α → 談話室では“お茶っこ談話”と“手作り品教室”の交わりの後に民謡の大合唱で笑顔が溢れ、涙も少し…。最後に「きよしこの夜」で閉めました。一部のメンバーは、この時間帯に鮎川、萩兵へプレゼントを配送しました。

昼食後に第二の拠点、牧浜へ移動、給分浜と同じ要領で、談話室では“お茶っこ談話”と → §

§ → “手作り品教室”を開催。その間にもプレゼントを買いに来られる人たちの笑顔は、地道に奉仕をされて来た宮城チームの人たちに心を開いていることだと思いました。

帰ってきてから、改めて気づかされたことがあります。それは、「朝起きて出かける場所(学校、職場)がある。家族と一緒に食事が出来る、主日に礼拝に出席できる」、このような当たり前なことが出来なくなっている方々がいることを忘れてはならないことを。常に覚えて祈りつつ歩んでまいりたいと思います。

直接、取材は出来ませんでした。青森チームは野田村の野田中学校泉沢仮設住宅での支援活動を、岩手チームは大槌町の安渡地区の仮設住宅への支援活動を、郡山チームは福島第二原発がある富岡町の方々が避難されている郡山市内の緑ヶ丘仮設住宅での支援活動を継続的に行っております。取材記者:東北地方連合壮年会長(山形キリスト教会員) 山口直由紀

